

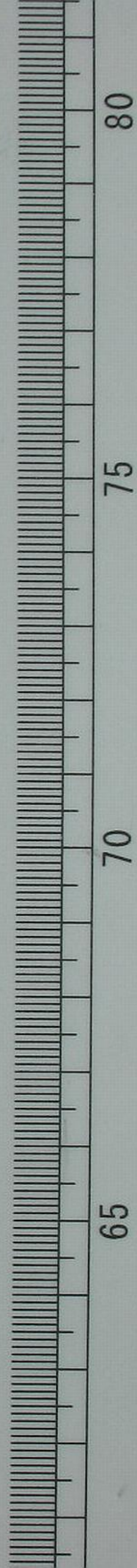


俗通

渡邊義方編輯
日本小史

第五編

下



A557
10

俗通 日本小史五編之下

東京

赤崎延房檢閲
渡邊文京操觚

是時ふ當ッて北條氏の威權も益々盛ん小幕政尽々
く時政の手裏より歸しその族黨一府より半を賴家の
暗愚あるもそは抑壓を受くる心頗る平々ありを稍
北條氏と厭ふの意あり時よ建仁元年秋八月賴家會
々病ひに犯され日と累ぬとど起つ能はば母政子賴
家の遊惰奢侈より忠臣と遠ざけ佞奸と愛し声色

日本小史 五編下

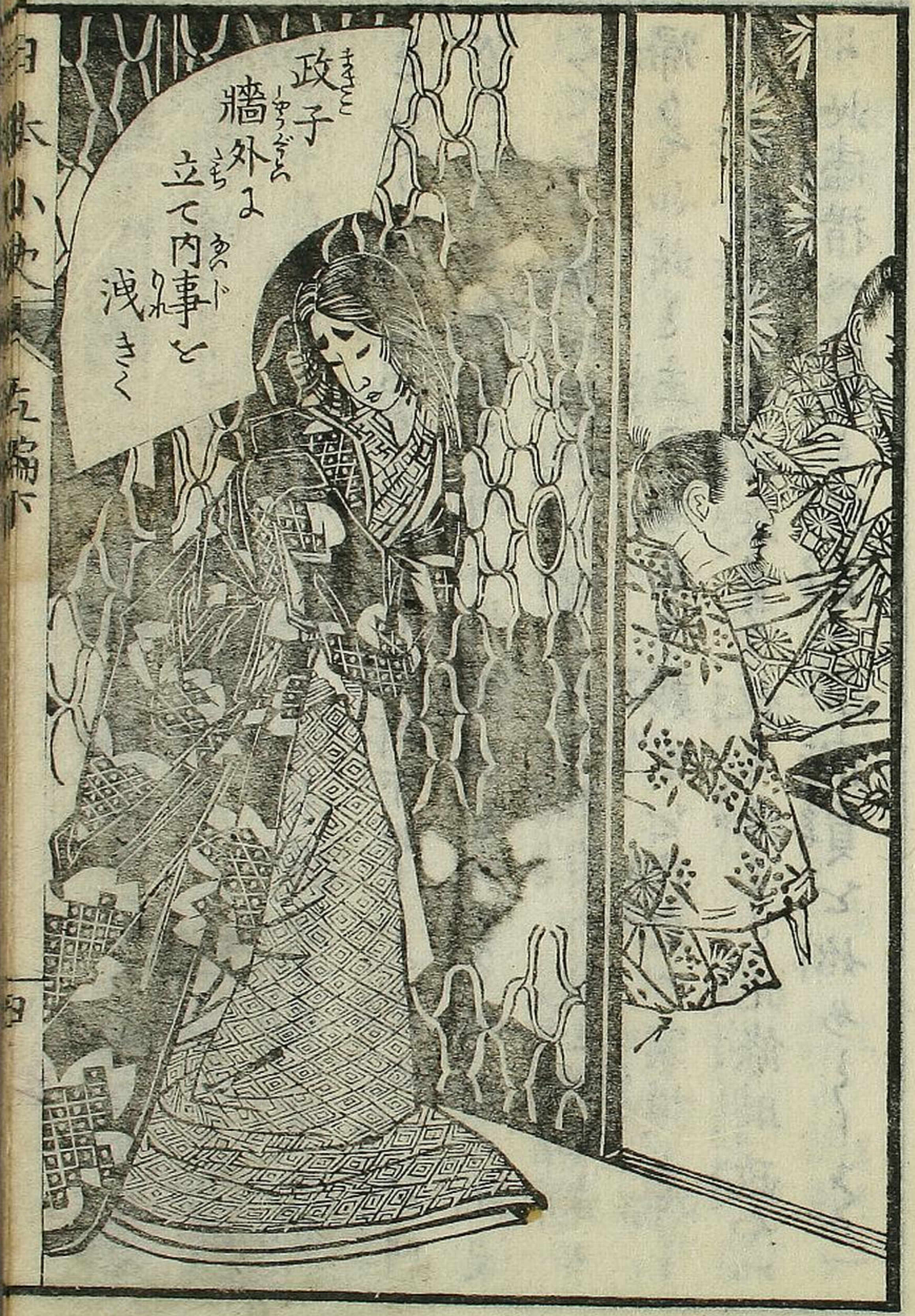
48-8441

よのみ沈溺まるる後見てかくて終始覚束りしと屢々論せども悔めを殆く持餘し折る今この病ひは罹りしことを却つて國家の幸福ありと父時政と密に議り頼家の將軍職を廢却して總守護職を長子一幡に傳へ而して關西二十八州の地頭を割きてめて頼家の弟千幡に予へいめんとせし一幡の外祖比企能貞頼家は説く云へるやう近日の議大よその當を得を權と分ち國を割へると争ひを起すの基礎不便とりしも餘りなり是北條氏が專横る

らざして何ぞや宜しく賢慮を回らしたまへと教唆され頼家へ有理と點頭きそは夜さう能負其他の諸士と召し寄せ病ひの牀に在りマモいりて北條一族と誅する策に斯々せん如々せよと大事の密談四方憚る咳ぶたののろろ外は洩聞え壁は耳の障子の外呼吸をあらして側聞そののろろを將母の政子あり事ふ聞を痛く驚き隔の障子と明んとて掛し手先とうち放し沈吟トワ獨り點頭音立させと忍び足そはまぐ臥戸ふたち戻り硯

引き寄せ忙ぐりく認め果し一通の文書と心利
たる老女は托し急ぎく父が許へ贈る夜中の使何
おとやらんと時政臆てかの文書とうち披き見て
大り驚ろる老女と勞らひ返り後獨り臥房は
入りしが眠らんとまうし睡らまど免やせん角やと
思按のらち秋の夜まうし短うく明る間近くか
りより里恁て時政漸やくより一ツの計畧を思ひ
付き天野遠景仁田忠常兩人と帷幕のらち伏せ
置つ左のらぬ体より能負より使とりて言さるやう

今日も吾方にて佛事と脩むるに付き聊その設
けのり職務執掌の鬱を散ぶる疎酒一盞まうを
盃一偏は駕を枉たまはるべしとまう他事もま
招待の口誼極めて慇懃ありさる毒計のらるべし
と鶉の毛の尖はかるとり毫毫をうりも知るよう
なれを能負を使とどり北條の第をさし
入来り中門と入るを暗号は跳り出でたる遠景忠
常齊しく白刃と枝つきて物とも言へむ左右より
只一撃と斬付る年老されど能負も腕は覚えの



鉄扇^{てつせん}の心得^{こころえ}ありと受流^{うけりゅう}し問^まゆる手の術^{てのわざ}二合三合
 不意^{ふい}を撃^うつ後^{うしろ}の方^{かた}へ踏地^{ふみぢ}々々と跋巡^{はつしゆん}ととろり紙^{かみ}
 得^えたりと附入^{つゝい}る遠景^{とんけい}忠常^{ちゅうじょう}たぐみ掛^かたる刃^{やいば}の電光^{でんくわう}憐^{あは}
 まし一^{いつ}能負^{のりおこ}へ左右^{さやう}の肩先^{かたさき}斬^き下^{くだ}げろと苦^{くるしみ}と一声^{いつしやう}叫^{こゝろ}
 びをもろくを後^{うしろ}居^いる礎^{いし}と伏轉^{ふくまわ}びそのまゝ呼吸^{こそく}の絶^{つた}え
 ろてたり事^{こと}の異變^{いへん}と聞^きゆるも能^{のり}負^おの從士^{じゆうし}甲乙^{かへつ}走り
 歸^{かへ}りて如此^{このごとく}と主^まの擊^うつ一^{いつ}顛末^{てんまつ}と比企^{ひき}の家^や族^{しゆく}よ告^つ
 うへ素破^{すぱ}事^{こと}とそ出来^きまらう仇^{あやまち}を正^{ただ}しく北條^{きたじょう}時^{とき}政^{せい}や
 ら此儘^{このまま}措^{たく}べきぞと能^{のり}負^おう子宗^{こむね}貞^{せい}と始^{はじめ}めととろと一

族^{しゆく}郎^{らう}黨^{だう}二千餘^{ふたごひやくにじふに}人^{ひと}一^{いつ}幡^{はた}君^{きみ}を奉^{ほう}戴^{たい}一^{いつ}己^{おのれ}が館^{たて}よ楯^{たて}籠^{かご}り
 おさく軍威^{ぐんゐ}と張^てりたりる己^{おのれ}が隨^ま意^い鎌倉^{かまくら}武^ぶ士^し北條^{きたじょう}
 方^{かた}よ屬^{ぞく}もろり御^ご館^{たて}と守^{まも}護^ごせんを走るもろり或^{ある}は
 比企^{ひき}と援^{すけ}けんしと馳^か加^かなり馳^か違^{ちが}ひ上^{うへ}と下^{くだ}と騷^{さわ}動^{どう}なを
 おり宛^まげり門^{かど}の沸^わが如^{ごと}く去^さりて時^{とき}政^{せい}は其^{その}子^こ美^み
 時^{とき}孫^{まへ}泰^{たい}時^{とき}とて兵^{へい}三千^{さんぜん}を師^しめて宗^{むね}貞^{せい}等^らが籠^{かご}り居^ゐる
 比^ひ企^きが第^{だい}へ押^{おし}寄^よせり火^ひ水^{みづ}よあれと攻^せ掛^かり干^{かん}戈^か漸^{ぜん}
 やく治^ちまり入り安^{あん}堵^との思^{おも}ひ成^なる一^{いつ}稍^{やや}太^{たい}平^{へい}と覚^{おぼ}え
 一^{いつ}み内^{うち}乱^{らん}蕭^{せう}牆^{せう}のうちよ起^おり鎌^{かまくら}倉^{くら}市^し中^{ちゆう}も忽^{たち}ちみ修^{しゆ}

羅の巷の奮撃突戦生死流轉の軍慮の進退衆寡敵
せど比企勢の續く味方のろろざれば刀折れ矢種尽
き勢ひ遂に窮まりて自ら火を放ち烟りのろろふ
自燼して死骸も止りぞ死するもあり辛くして圃
ろ幾斬抜け脱して縛し就つても死耻さうを輩もあ
り一幡君も自燼したまひ茶毘の烟りと立上る消て
果敢るた最期あり頼家かくと聞たまひ憂慮憤懣
かく由もまくいと朽をうも思へとも病ひましく
重くして起臥さるも心は任せを嗟嘆の外ぞたうた

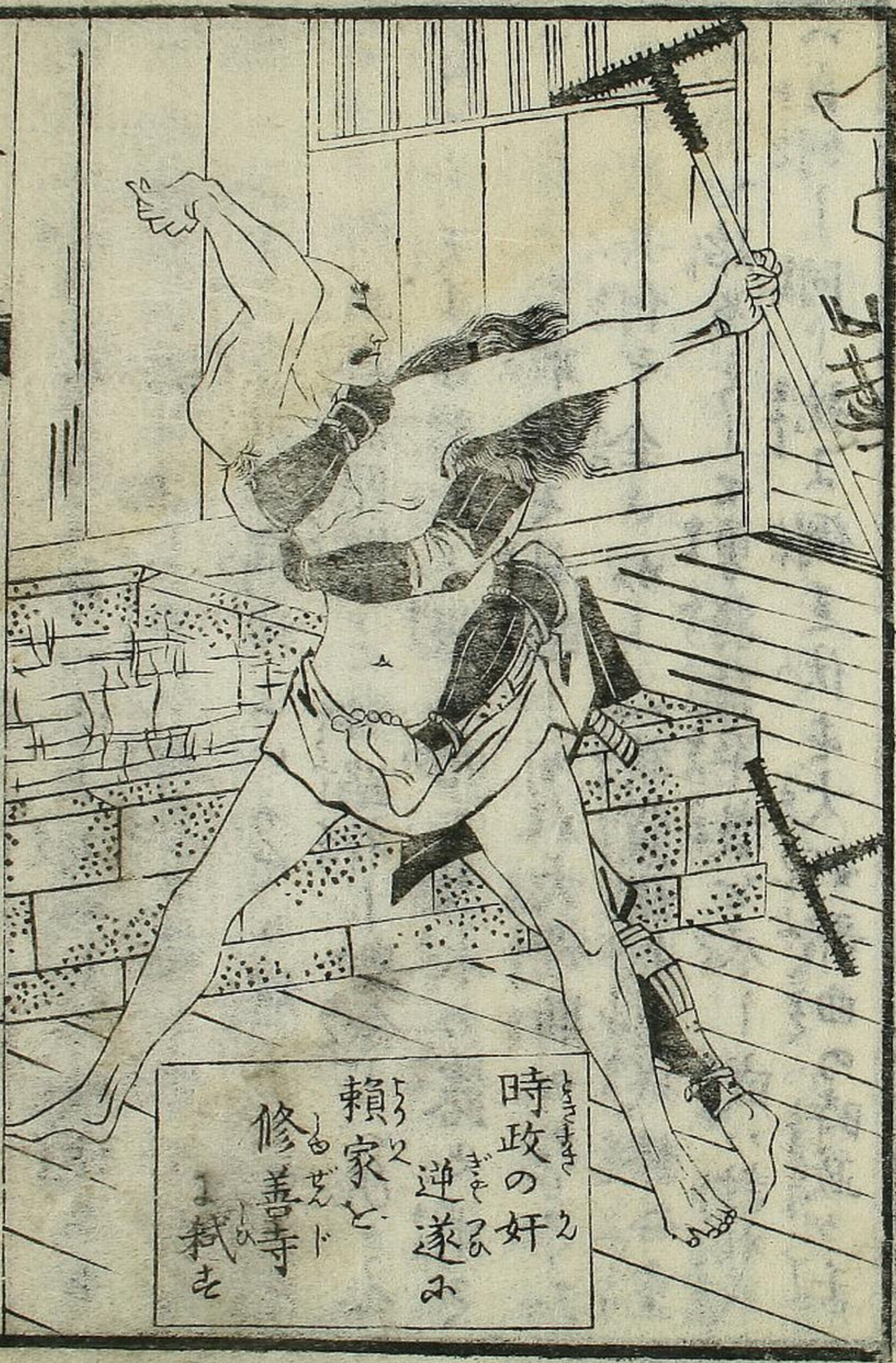
卿の初め時政仁田忠常を命じて能貞を刺しめ是
に至つて揚言ましく忠常を私一の怨を扱さ
し恣ましく能貞を殺すのそまうむ己が罪を掩はん
たり頼家卿と煽動し我と圖るの企望あり憎むたき
も忠常より誅せむんをりるたうもむと根もあは
事不根と添て遂に忠常と誘殺し頼家より逼つて髪
と剃しめ伊豆の修禪寺に幽閉し幾程もまくして人
を遣はし頼家と殺さんとせしむるその趨勇と憚り
浴する間と窺ひ飛短とりて咽喉と約め遂に弑殺

せしむる時二年二十三長子一幡先卒を猶二子あり
 長者四歳千幡養つる子と一髪と削りて僧たり
 む公暁といへるは即ち是なり次と千壽丸とり中
 務某氏の養子とせ仍て頼家の弟十二歳より北
 條氏の立る所とるり征夷大將軍と襲ひ名と實朝と
 改め時政が弟小居り令と下して諸將と安撫を元
 久元年三月伊賀伊勢の間へ平氏の殘黨兵と揚げ州
 の守護首藤経俊と襲ふてあはれ走らし勢ひとさく
 熾ありと櫛の齒と挽く警聞鎌倉に達せし武

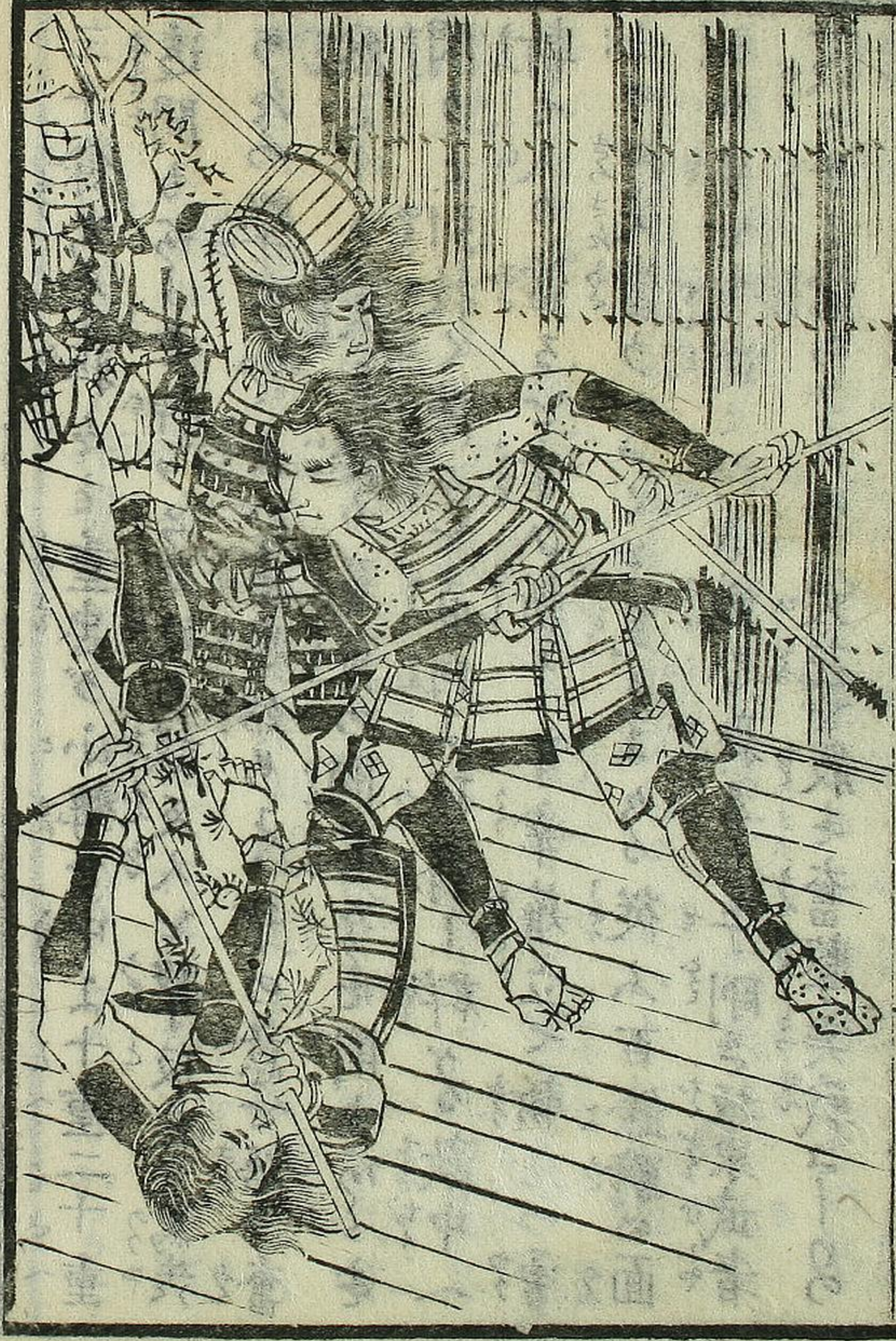
藏守平賀朝雅をく追討せしむ素より烏合の小
 勢ありをたが一戦し蹴散して賊魁平基度同く盛
 時と捕へ一挙して平定の功と奏を時政感嘆洩る
 を厚く朝雅と賞を朝雅の義信の子より畠山重
 忠といふ時政の女と娶りて親戚の縁故あるもの
 ら朝雅が娶るところの妻女の時政が後妻牧氏の腹
 なれを實は牝雞の晨なる亦と已と得ざるもの
 歎故を以て時政偏に朝雅と愛し稍重忠と憎と
 して終にあはれ殺さんとし逆心ありと誣告して義

時々房として兵と率めて重忠の子重保とその第
 二圃と無残少も攻殺さしむ當下重忠采地は在り
 て鎌倉の變事とありむ時政人と遣へし結むた
 りをみるやう 鞍下は不慮の變事とを出来より急
 き馳上らるとよとらふ欺むのろくとありざれば重忠
 即ちち百餘騎と從へ邑と癸して夜と日は継ぎ武者
 押さ人も戒儼しくとも鎌倉は程遠うしぬ金井の
 原もを来りし彼方と屹と見て所は砂畑りと蹴
 立て隊伍と乱し押寄せ来る大兵ありその勢およそ

三千餘ちや奔々と重忠が小勢と中は十重二十重
 透間もろくむ押ツッし込め謀及人と撃取ると罵詈
 め々の撃てかきまは重忠始めく其の意を悟り奮
 然として大に怒り免角の問答なるを間もろくを
 閃りと引抜く陣刀と真向は振翳し群ぐる敵中へ
 斬て入り當ると幸ひ斬る不幸薙立て斬立つ勇
 士の刀尖當りがくぞ見えよる從ふ百餘騎の面
 々も爰と先途と防ぎ戦ひ孰も手剛き坂東武者
 一以て千は當らざるはみく火花と散る奮撃突戦さりの



時政の奸
 逆遂み
 頼家と
 修善寺
 一裁を



大軍立足多くあざろよなつる十反りまり敗走なを
を追掛おひ詰り枕と争ふ重忠が額も當り一
羽の流き矢急所の痛痕といつて堪らん颯と潰
ちる鮮血淋漓眼眩うて鞍路外一無念とつひさぬ
身と仰天は頭轉倒と涙び落ち草木の露と消え
ゆく勇士の最期ぞ目醒一々れ大将斯のおとくお
をを残兵何ぞ全さからん族黨稻毛重成榛谷重
朝等と始めうて勇將猛卒数と尽し或ハ討れ或
ハ自刎一同ト枕は倒と伏を大奸邪曲の時政が舌

の利刃の恐ろしさと天下の士人重忠の寛死と憐
れ時政が奸曲と憎まぬ者なんなりと時政暴
逆まじく甚しく妻牧氏が詞は随ひ實朝を殺して已
が婚ある朝雅とめて鎌倉の主と仰ぎ尚暴威張逞
しふせんとせし政子聞る大は驚き實朝を義時
の宅へ迎へ入ると其害を避く義時人となり温和謙
遜上と敬すひ下と憐れ士と愛するの心深く常に
父の狂暴と片腹痛く思ひつ諫あるを辱々
ありさるる依り鎌倉の武士なる義時の恩威は服

日本小史 五編六

田村小史 五編六

九七

一此事こゝのる及び時とき政まさと捨すてらる義時よしの第一だいいち聚あま
 り俱實まこと朝あそと守まも護ごるを少すくを現げは公道こうどうは親しん疎そを
 との義よし時とき終つひは時とき政まさ夫つま妻つまと北きた條じょうの郷さと里らは執しつ居きせしめ
 將しょう士しを令しりて朝あそ政まさと誅ちゆう殺ころし事こと漸やくは平へいぎしうべ
 義よし時とき代だいッて執しつ権けんとあり政せい畧りやくよくその度どは適あひ父ちち時とき
 政まさの比ひ類るいはろくぞと吾われ人ひと俱ともは稱しょう讚さんせしとぞ時とき政まさ
 時ときは年ねん六む十じゅう八はち髪かみと剃そりて郷きやう里りは老おひ後のち十じゅう一いち年ねん死し
 経へて卒そつを此こゝ奸あや人んどよりて天てん壽じゆうと全まふし安あ樂らくし死しを
 ろ成え得えしの天てん乎う命めい乎う將しょう何なにぞ実まことは僥がう倖じやうと言ますのと

是これより先ま諸しよ豪ごう傑けつ千せん葉えつ常じやう胤いん土ど肥ひ實じつ平へい等とうふ老らうて
 死しし佐さ々々木き高たか綱なう熊くま谷や直ちく實じつとしく悟さとる処や在あらん
 浮うき世よと避さへく隱いん逸いつし去さてその行やう処ところは老らう獨どくり北きた
 條じょう氏し專せんら幕まく府ふの事ことを掌てる而しかして實まこと朝あそは無なが如ごとく
 日ひ夜や文ぶん事じは耽たり和わ歌かと詠えいし詩しと吟ぎんし只ただ風ふう月げつと友ともと
 して空あましく歳さい月げつと送おくるのとも人ひと君きみの器うつははららね
 を義よし時とき猶なほ驕きやう慢まんの心こころと生なし良よらぬ所ところ為なる多おほうをららぬ
 是これ歳さい上じやう皇かう位いを皇かう太た弟ていに譲やる守まも成じやう親しん王わう立たつまと順じゆん
 徳とく天てん皇かうとまはは是これより先ま和わ田でん義ぎ盛せいへ上かみ總そうの国くに司しふ

任まぜらまんあらん乞ひ懇ん祈き敷す度どよからんと虫どの
義ぎ時とき深こく和わ田で義ぎ盛せいの勇ゆうよらるる衆しゆらる已おじまが眼めの
上うの瘤ぶふちとし心こは深こく忌いむの餘あまり態ことその乞ひ
を聴きさる義ぎ盛せいも稍やその意いと悟さとり再またび書しよと大江廣おほえひろ
元もとは托たくして切きは請こへ止やまれど是これも聴きさるべくも
あらど義ぎ盛せい映えい々く不ふ平へいと懐なき傍わ若わ無な人ひと義ぎ時ときの拳こぶし動う
かみと互たがひの隙ひまを構かまへ折おりの頃ときへ建た保た元げん年ねん夏か六ろく
月つき信のぶ濃のの人ひと泉いづみ三さん郎らう親ちか衡ひら先さき将しやう軍ぐん頼より家けの遺い子し千ち壽じゆ丸まる
を奉たごりて兵へいと起おき奸えん賊ぞく義ぎ時ときと誅ちゆう滅めつして幕まく府ふを挽ひ

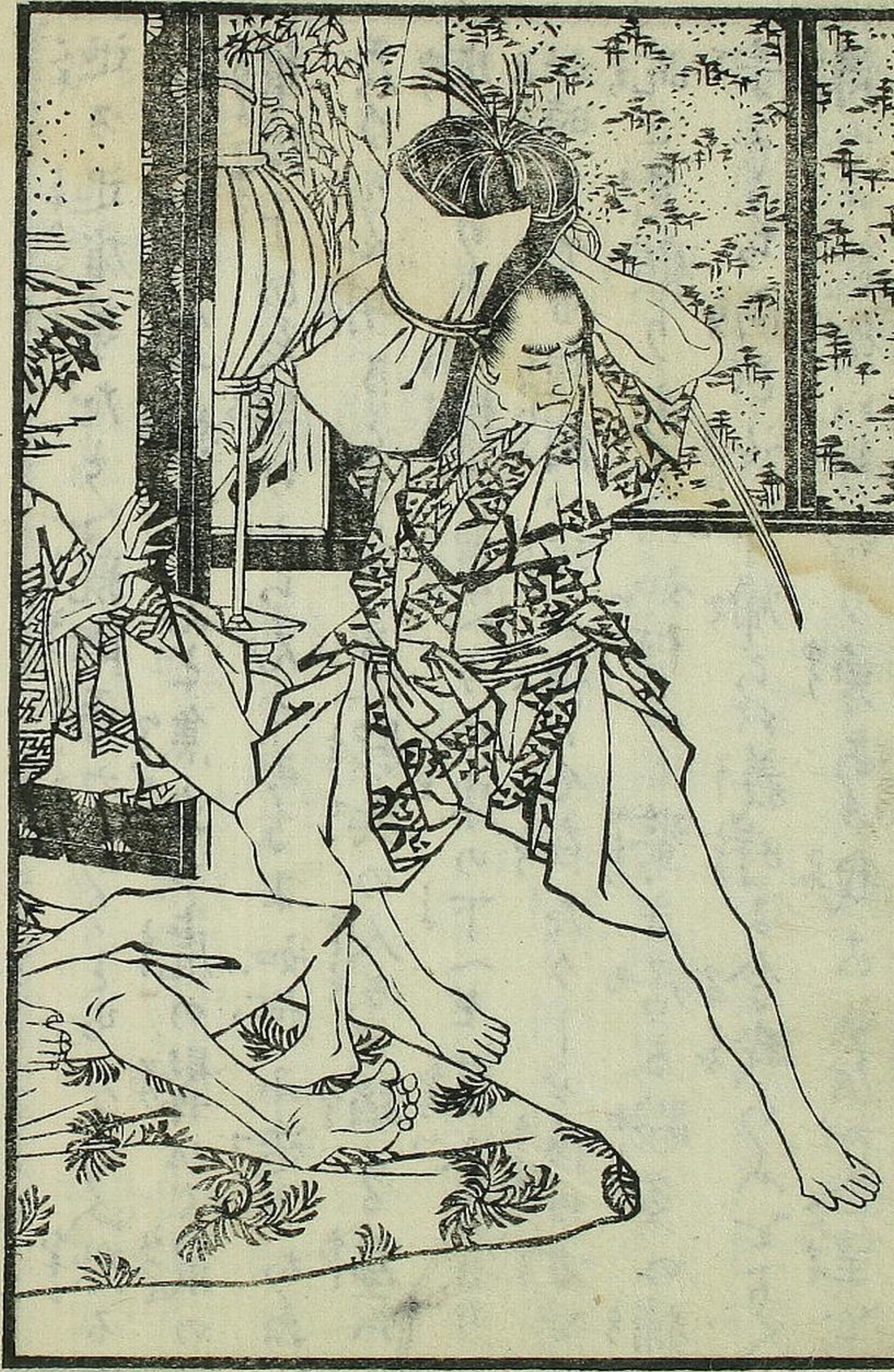
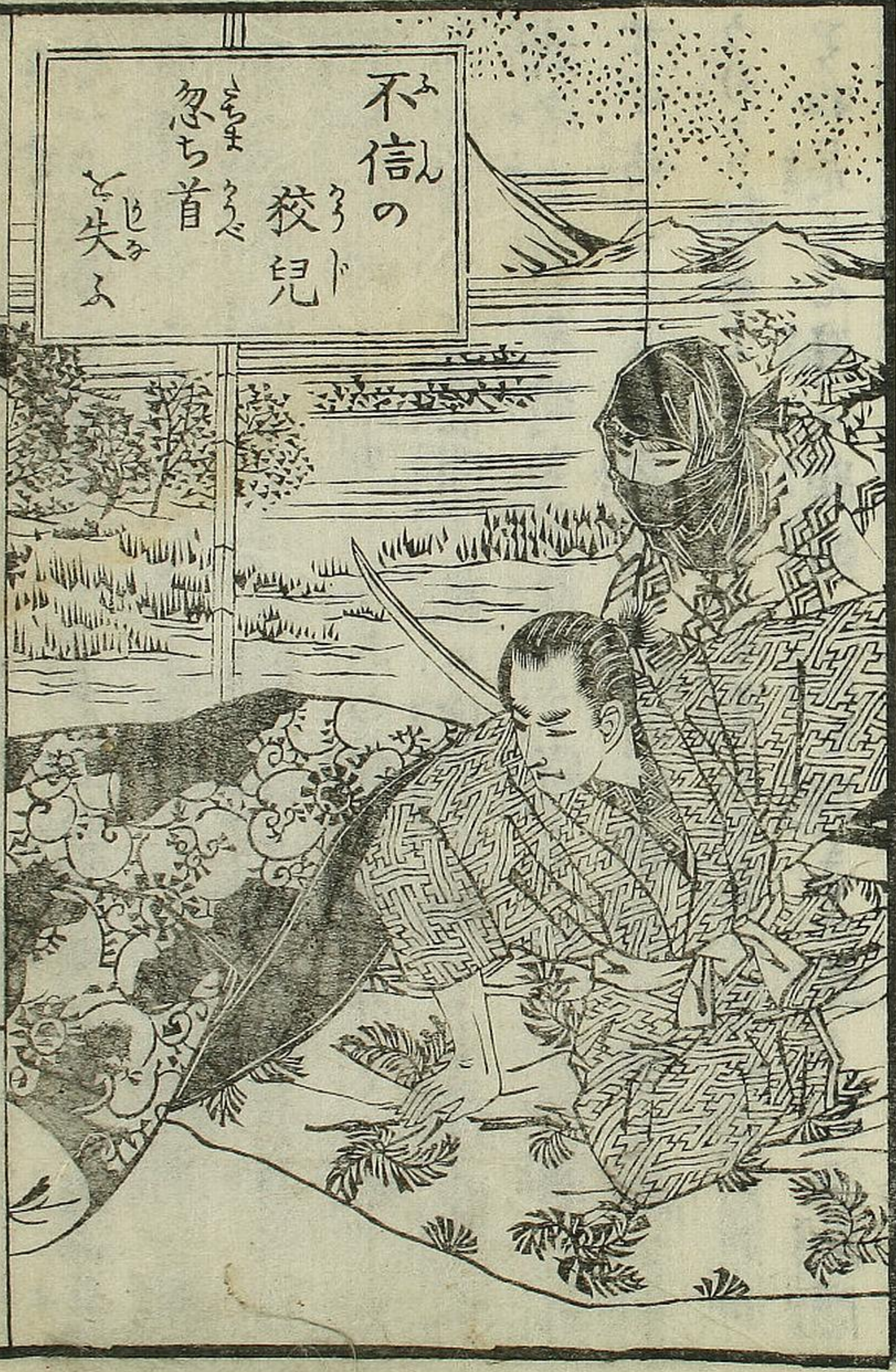
回まさんととと檄げき文ぶん紙し四し方ほうは飛とまり僧そうの安あ念ねん死し
説せ客かくとし諸しよ豪かう傑けつと招まりしむ會かい義ぎ盛せいの二に子し義ぎ直ちく
義ぎ重じゆうからび一いっ族ぞく柄へい靴か平へい太た胤いん長ちやう等とうその企く望ぼうは一いっ味み
せしくを安あ念ねん大だい悦えつび千ち葉えつ成せい胤いん説せて味あじ方かたは引ひ
入いんとせしが成せい胤いん曾そうて肯きんを安あ念ねんと執しつへてとと胤いん
義ぎ時ときは送おくり事ことあらうと告こ発はつをせしと聞きて驚おどろく義ぎ
時とき即すなはち夜よ直ちち謀まう主しゆ泉いづみ親ちか衡ひらが第ちと十じゆ重じゆう二十にじゆ重じゆうは
とと田でと逃にへせと入いたり親ちか衡ひらの寐ねもや
ららど獨ひとりり閑ひま室むろは静しず坐ざして燭しやくを秉とりし書しよと見みて

在りし表の方俄に劇しく雷騒ぐとち聞て事
 頭を這いと知るものうら少しも騒ぐ気色なく自若
 として眼目も觸れそのまき兵書と繙きて在り當下
 捕手の人々へ吾先みと乱入一家の隅々残る隈なく獵
 り求むる蚤取り眼も遮る敵一人もなく何の間も
 やら逃失せん寂寞として人氣も是れを何の間に
 と呆れ惑ひら尚よく捜る彼方の小室障子も映る
 人影も借いと人々走り寄り逆賊親衛とく出よと
 声々と呼ちるれど更ふ答へのちらされば血気も

迅る迅雄等たと親衛勇力ありともなうぞふ恐る
 おとめらん手捕せん焦立つ虎の鬣ひく鼠の
 輩障子ひた開け入らんとまると如何に造りあは
 たりらん明るとそおまき駿兵の人々ぞ踏むる墨の
 床とこのふ倒轉も覆へりて床の下へぞ落入りしり
 此時までも親衛の机も倚りて在たりしが後の方と
 屹と見顧りあまの如何ふと驚き居る駿多の捕
 手よりち向ひ汝等歸ら義時は今我の心をよく
 傳へよ親衛の智のり勇あり我の企望を

日本小次郎 五巻下

不信の
 校兒
 忽ち首
 と失ふ



今一日ちやく発せむかふる不覚に取るまふたふ是
 も將天なり命なり時ふりきても義時の運の強
 きよ時機到るまふ汝が首へ汝が胴は預け置べ
 我暫く跡と埋め一旦あの地と逃るべし心得る
 りと宣示を大膽不敵の宏言を憎しと思ふ木葉
 武者尚懲む間も前後より群がりかふるを事とを
 せむ妨げまると踏退け蹴退け背面の壁は身と寄
 うけろ押まよと見えろが忽ち姿は消て見えぬ
 是れはまん豫て親衛が心を碎きて造りたる敵隠

の壁よして下ろへ深き抜穴ありさかろる危急の場
 は臨み容易く逃まん為なりとぞ案下休題千葉成
 胤へ四五日過てある夜の事何者ともあまを忍び入
 り成胤を暗殺しそが首級を庭の松ヶ枝に梟け幹
 灰白りて「鋤奸去者泉三郎親衛也」との十字を題し
 暗ふ紛まて立去りしを知る者絶てたりざりしが夜
 明て家人等大ひし驚き周章狼狽大方ありぞ人
 々その報ひの神速あり成見ても快よく思ひぬる
 かくて後親衛に逃まてそは行く所とあらむ千毒の

髪と削りて京師に匿と義直と始めその黨與にふ
 縛よ就く獄よ下さる時よ義盛の采地ある下總に
 在りてあの凶変と聞きいふで我子と救さんと取る
 そのも取りて急ぎ鎌倉に馳上り已が多年の功勞
 代えいふで我子の罪科と購ひ得んと請ふと
 切多り實朝素より義盛の他志あるを信トたまふ
 がゆ名特よ義直義重が罪と宥して父義盛よ責付
 らる義盛感悦浅うを君恩の辱けあると拜謝し翌
 日宗族九十八人と率めて幕府の南庭に列居て大江

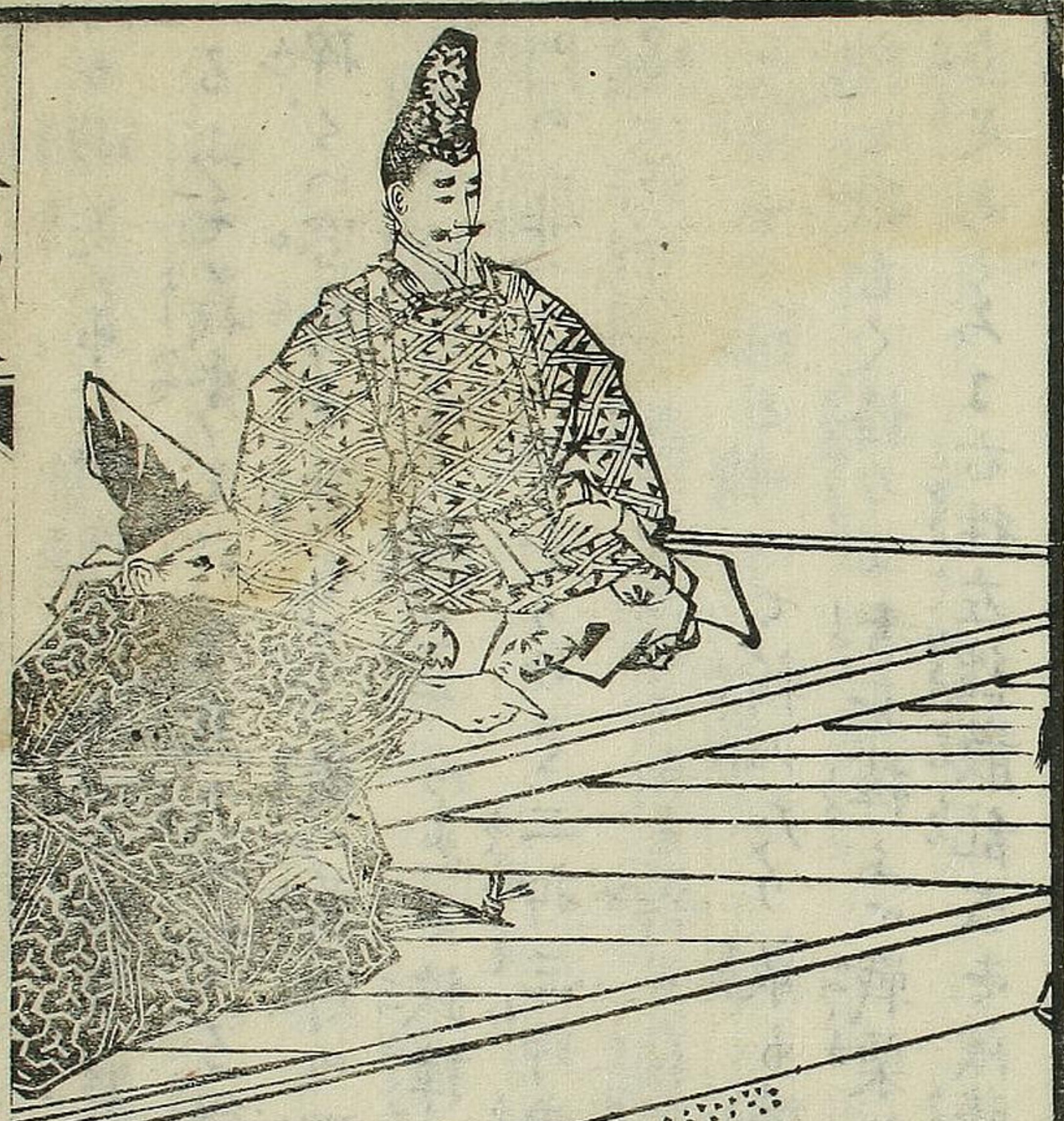
廣元よ因りて稟をやり豚兒等漫よ不軌と企ぐて
 干戈と動うさんとふせし罪萬死よ當ると宥され
 一に偏よ君恩の辱けある所何と以て報ひ奉る
 へき今も宗族九十八人不遜の罪を顧むを愁訴の
 一儀に他よあつて柄鞞平太胤長あと同トく親衛が
 隠謀よ干與りその罪正よ軽うを虫と既よ豚兒
 と宥されし上の併せて胤長とも恩免あるやう宗族
 一統の功勞代え偏願ひ奉つると列と正し愁
 訴の趣旨上段よ着座したまふ實朝公の左右よ

へ鎌倉恩顧の武士の面々大紋の袖と列ね烏帽子
 を正して威儀儼然實朝頻ふ點頭たまひ義盛が
 請ふ任せ胤長と聽し得させんと言とらち消き義
 時が折あそよけれと奸者の佞辨とよかくと拒む
 のつたりま執権の權威は誇り獄吏ふ命トて胤長
 と緹緹のま拘出し態と義盛が前を過りて檢非
 違使ふ附し罪と糾しと陸奥へと追放つ折も折と
 て君の面前諸候の列居る人中とて耻と與えし義
 時が今ふ始めぬ佞奸邪曲かくまで辛く物せられい

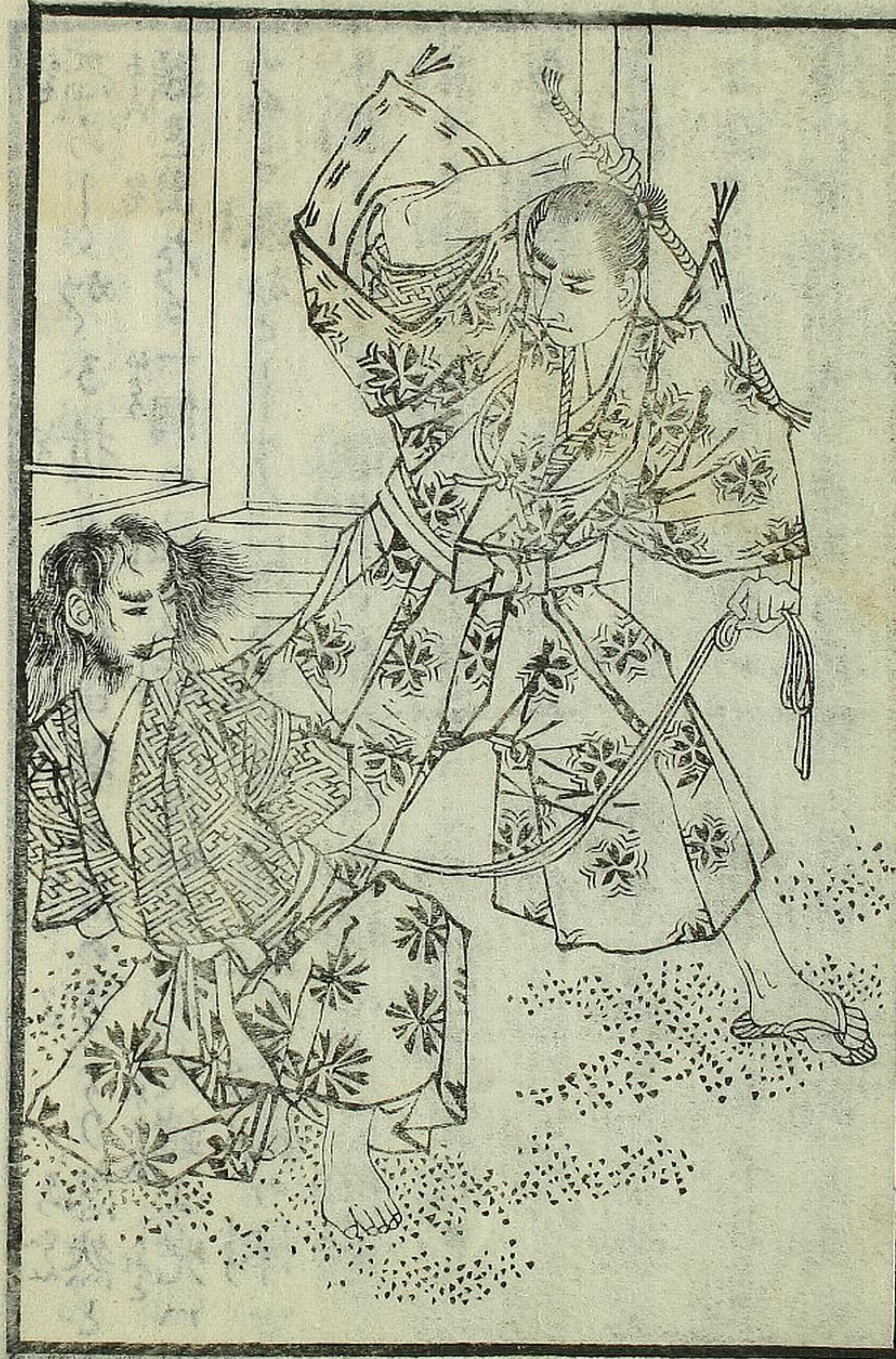
うぞう忍ぶあそ得ん今ふぞ思ひあつせんと重
 ある怨ととくよりもふく義盛大は慚ぢ分り自ら門と
 閉て出せ終ふ北條氏を滅さんと欲し日夜宗黨と會
 してその謀畧と議を一族三浦義村その事の成ら
 ざる後先見して弟胤義と俱し北條氏の第に至りそ
 自訴したり義時方と客と棋と囲て在り其の凶
 報と聞ものうう敢て噪々色もまなく結局て起上
 り常日の禮服そのまゝと烏帽子と被り水干衣を
 穿て幕府と趣き大江廣元と議り實朝と奉トて

頼朝の御影堂に徙うつりまわらせ長子泰時ととし兵
 を將ひきりて防戦の準備とさく嚴重あり去さるど小義
 盛もりの百五十騎を三隊に分ち義時廣元の第と攻め
 その一隊と將ひきりて幕府不趣おのき實朝を取らんとせし
 ろどと名義時廣元北門より入りて兵と部署し諸門
 を堅く鎖しつ大将泰時必死とあり爰と大事と防
 ぎ戦ふ兩軍互ひひし入乱を入んとまろ成入と下と遮さり
 る優まさむ劣おとらぬ軍の進退射掛る矢の雨のあらとく修羅
 の街の攻鼓天地も崩る鯨波の声勇はままくくめままく

恐ろしくかゝる折ひりつ和田勢の後の方より忽然と
 頭あは出たる一個の暴武者黒皮かどのの大鎧おと境さの
 つら振ふりつらん緑の黒髪くろふり乱まり黒鉄の棒と
 小腕こよりのまま眼清く眉秀まゆで色皎はくくく鬢青く
 言ことでも知るた是ことは義盛の三男朝比奈三郎義秀
 あり勝敗果はつあたと見てかの鉄棒とうち振りふりく吾
 と續けとつつりり迅たく群むる敵中へ跳り入り當ある
 二任ませて薙あげなせせ頭くの碎け脳流のとと即座そく死
 する者數ありまるまの猛勢むふ北條勢きたの崩くは立た



義時の大奸
義盛の大智
七激を



る逃足にがしを多く門内へ入るとそのまゝ堅く鎖して出ざ
 るみぞ義秀よしひでまはしく焦立あせたててかゝる微々びびたる小門を
 碎くだく容易やすき業わざるがう爰こゝへ幕府の門かどみれば左ひだりにて
 へ君きみは恐おそまなり術わざらそりまると鉄棒てつぼうを傍かたわらに投なまて
 門の扉かどへゆる手をうけり二押三押ふたおしさんおし曳ひとけたり大
 喝かっ一声いっせい貫木くわんぼく忽たちちホツキと折をと左右さゆうへ颯さつと開くと
 そはし、動うごと叫あいて斬入きりいたり敵も味方あつちも義秀よしひでが鬼
 神かみと欺あざむく怪力あまからの舌しほを掉おふて戦栗あつちおそと北條勢きたじょうせいの
 立足たちあどろし右往左往散乱みぎむきひだりむきさんらんるまぬ勝かつし乗のりたる和田

勢せいへ火水ひみづはあまると攻立せまく向ふま前まへるた破竹やぶたけの猛勢もうせい
 敵將てきしやう足利義氏あしかがよしのぶの敗兵はいたへいと罵劾ののちがましゆ返かへさんとなまた
 へ擒とらしせんと馳寄うりよる義秀よしひでアハヤと驚おどろく義氏よしのぶが甲よろひの
 袖そでとひた攪かへ力ちからは任せまて曳ひとむく義氏よしのぶもさる者ものゆゑ
 攫とらしまがうも一生懸命いっせいきんめい馬うまを鞭むちうち両拍蹴りやうぱくせういし行方ゆくへ
 の濠ほりと跳はりとえ辛つらくもあゝの場ばを逃にれう義秀よしひでハ攫とら
 たるまあ甲よろひの片袖かたそでより断ちぎし吾手わがては残のこりて長蛇ちやうだと逸は
 一遺憾いっかんでんやる方かたなれたるのうら土屋義清つちや よしひで古郡保忠ふるぐんたもと等
 と勢せいと合あせる奮撃突戦風ふんげきつせんかぜに乗のりて火ひを縦たてばとく

烟焰天と焦一猛火熾んふ燃あぐる得たりや應と攻
 たを焼とて接戦するあの一晝夜天もたを明んとま
 る頃及和田勢いよく戦ひ勞れ軍を收めて前濱に退
 るく恰り好一横山時兼ある者族拳ツと兵と率お來
 和田勢と援くその勢あよりそ三千騎よりとび勇
 む勇將猛卒疾や進めと再度の決戦諸国の將士等
 鎌倉の變事と聞き皆來りて實朝と守護一北條の
 軍に馳加ふる是に於て兩軍迭み銳氣と増し已より
 午に至るまで決戦あよりそ五十回合ての離と離とて

はまの寄かふる虚々實々憐むと一和田勢が力と頼
 む稀代の驍將土屋三郎義清の流矢は胸と射貫れ敢
 むく討死あしたるより義直保忠義重等同ト枕し戦
 死せしうべ義盛大ひよりち歎き可惜諸子等と先立
 せ吾も何の樂とあつんと覚期決りて起むるに續
 く味方のあつざれを残兵僅に千騎に満む尚挑と戦
 ひしが刀折と矢種に尽き終に戦死あまを見て耻は
 知り義と重んぶる輩或る討死あまをわたりまとい敵
 と刺ちぐる果敢なく消しそが中は朝比奈三郎義秀

の殘兵五十人を引率し海を航りてあらし浪の行衛も
あらし落失てそ終る所とあらしむるも鎌倉功臣
の隨一たる和田一族一門も単一一朝の露霜と消え
果敢多た栄枯得失歎むるも尚餘りあり箇へあし
五月二日の事ありかくて乱黨まことぐく夷ぎ世に
暫らく太平しを實朝累遷正二位又叙せられ権中
納言に任じ六年十月右大臣に拜しその母政子に
從二位と授けたまふ是より先政子髪と剃りて尼
とありしより是に至つて世稱して二位の禪尼

とりし承久元年春正月二十七日實朝任叙の大禮
を行ひ父祖に超る官爵の身み餘りぬる天恩と
遙に拜し奉つると鶴ヶ岡八幡宮に詣づ公卿百
官あしと扈從に儀式頗る嚴らなり護衛の隨兵
一千騎前驅後從整々としてあらしもまきし北條義
時劍と執て實朝が後に従ひ文章博士源仲章其
傍に在り門を入らんとあらしと義時俄に病起ると
稱し御劍と仲章に附しその身の頃て退きぬ實朝
拜謝の式終り退き出んとあらしたまふかゝる儀式

へ古来より夜とめてまるの法ふきを此とた既より日
 も暮て天さ人いとどかた曇り晝るや暗き樹下暗
 隨兵等いゝま門外に在りて餘所るづら護り居て敢
 て式場に入る戎許さば従ふ者い仲章のそ實朝や
 階梯と降らんとせし程より傍より立たる大樹の陰よ
 り烏夜の烏羽王の真黒装束覆面頭巾白刃
 ひッ提げ忽然と跳り出たる一個の曲漢矢庭に突朝
 成たる下撃のうまを刀尖避る間も何を仲章肩先よ
 り乳の下かけて斬さげらば彼此ひとしく倒るる戎

上りかつく細首と撃かといつて左右の手も提げ
 一まゝよえの木蔭へ身と潜をせて入りふる君撃
 とたまひぬと内外一度に騒ぎたち敵と誰と見認
 ちるうりまく只徒らふ混雜たるものこそ詮更なる
 き折る彼方の樹蔭よ声たぐ人々驚き噪ぐべの
 らぞ吾い先將軍頼家の一子公曉るり往昔にが父
 頼家公伊豆の修禪寺に幽殺されたまひし叔父
 實朝が業ふして己を天下に掌握せんと奸臣義時と
 心と合せ兄を弒せし大逆無道叔父ありとて父の仇



五
多

七
三

五
多

七
四

公く曉けうのの狂きやう
 暴ぼう實じつ朝あさ仲なつ
 頭あたま闇やみ狙ねら
 撃うせせららるる

撃て怨み成晴さんと多年の宿願成就して曩日義時
予と京都より召返し鶴ヶ岡の別當に補せしむ今生
と爰に便りと得て父の仇たる實朝義時が首を得
しあとの嬉しさととりよへ正しく仲章と義時と誤
認せしるべし借の敵の公曉よと声を知己に捕へ
んと圍むに難く斬ぬけて三浦義村の家に至る
箇の義村の子公曉の弟子たるの故を以てあり義
村密にふかき義時を告ぐ義時即ち力士をやり疲
して眠りし隙を窺ぐひ物ともいふに斬つらる斬れ

まがりも跳起つ公曉の怒まる声あり立て汝等なん
ぞ無禮あると刀を抜の間あり袷先を進し一人
の力士の利腕とろく肩ふりけ礎と投たる人礫後へ
廻りし一人の力士が焦つて撃込む刀尖まるどく振
向く塗炭の公曉の首級に丁と落たる此世の別路
敢なく撃しむ死せり事の原由を推測し義時
實朝を除けんと欲せしりど自らあまを行ふと死
ハ弒逆の罪逃まじりく士人の心乖離せん如き公曉
の手と藉たまき除くんと深くも思ひ廻ら

つ儲こそと公暁と京師より召還し鶴ヶ岡の別當とみ
 一斯ハ巧と果せしなりとぞ嗚呼恐るべし憎むべし
 實朝が暗愚公暁が狂暴鈍くも彼が術中不陥り骨肉
 相食と北條氏の餌とまりしぞ浅猿と頼朝天下ふ
 覇よりより是よ至つる三世凡そ四十年ふして七
 六

通俗 日本小史五編之下 終

大坂	前川源七郎	越後三條	青柳正兵衛
同	岡島貞七	同	丸屋音八
紀州和歌山	津田源兵衛	同	番場吉次郎
阿州徳島	坂井萬吉	同	村山長太郎
遠州掛川	三原屋甚藏	同	山口萬吉
同	天井金藏	同	竹屋利七
三州豊島	泉屋兼藏	同	浅間屋長七
尾州名古屋	永樂屋東四郎	同	嘉坪屋由重門
同	美濃屋代助	同	目黒宗内
同	中村重兵衛	同	佐藤友吉
甲府山梨	内藤傳右門	同	越中屋與八
同	五明堂正八	同	浅野六平
同	小西屋庄左門	加州	金澤近
			八郎重門

